

このpdfは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第1巻(くろしお出版、2007年)の内容見本です。ISBN 978-4-87424-374-9。無断引用はご遠慮ください。『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/edu_top1.html

音声学からの接近

野間 秀樹 (のま・ひでき)

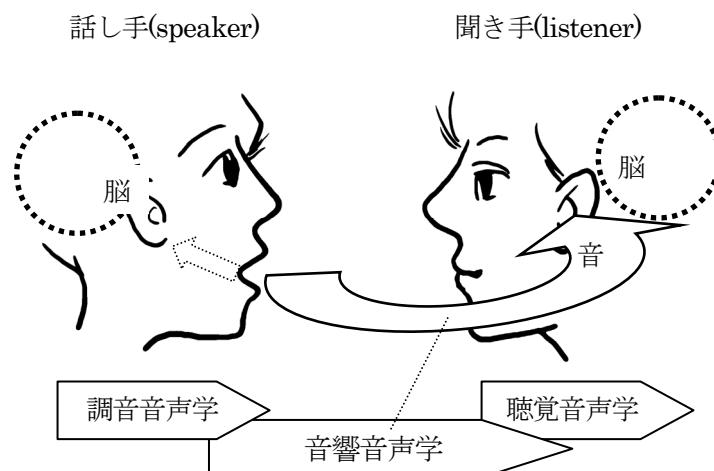
1. 音声学

1.1. 音声学とその分野



人間の言語音(speech sounds)をめぐる様々な問題を扱う学問分野を、音声学(photonetics/음성학)¹⁾と呼ぶ。本稿では韓国語学と韓国語教育に必要な音声学の基本的なことがらのうち、主として単音について整理する。必要に応じて、日本語との対照言語学的な観点からも見ることにする。

言語音が発せられ、聞き取られるまでのプロセスは、次のように図式化することができる。それぞれのプロセスごとに音声学の下位分野が形成されている：



話し手が言語音を作り出すプロセスは、調音音声学(articulatory phonetics/조음음성학)，それを聞き手が耳で聞いて理解してゆくプロセスは、聴覚音声学(auditory phonetics/청각음성학)，その間の物理的な音が伝わるプロセスは、音響音声学(acoustic phonetics/음향음성학)が扱う。なお、話し手は言語音を作り出

1) 「音」を表すギリシア語 φωνή (ポーネー) よりなる。최현배(1929;1937;1955; 1961³:40) では音声学を“말소리 갈”と呼んでいる。この“말소리 갈”的ように韓国や共和国の音声学、言語学では、漢字語ではなく、しばしば好んで固有語で術語を作つており、術語によっては一定に広く用いられているものも存在する。



韓国語教育論講座 第1巻

すだけではなく、普通、同時に自らの音を聞いてもいる。

韓国語の音声学に関しては、이호영(1996), 신지영(2000), 신지영·차재은(2003; 2004²⁾, 배주채(2003)などが最も新しい概説書である。韓国語の単音に関して詳しく記述した研究としては이호영(1996)が最も詳しい。우메다[梅田博之](1983)は日本語との対照的な記述を含み有益である。規範主義的な立場からの記述として이현복(1989)と発音辞典である한국방송공사(KBS)(1993)も参照。²⁾

1.2. どの言語を対象とするのか——標準語と方言

言語音の体系は「日本語」の全体や「韓国語」の全体がそれぞれ同一の体系を成しているのではなく、それぞれの方言ごと、あるいは更に小さな地域語ごとにも異なりうる。従って、音声学的な検討をする場合や、発音の教育をするにあたっては、「韓国語」といっても、今どの「韓国語」を問題にしているかを、常に把握しておかねばならない。

一方、韓国語のいわば人為的に定められた「標準語」と、自然に形成されている方言とは区別せねばならない。韓国語の標準語はソウル方言を基礎に作られているものであるが、アナウンサーなど、訓練を経た一部の職業的な人々が、放送などの一部で実践しようとするものであって、いわばどこまでも理念的な存在であるのに対し、ソウル方言を始めとする方言は生得的な言語である。したがってソウル方言が母語であることはいくらでもありうるが、「標準語」が母語であるなどということはありえないわけである。

2) 音声学全般については、Ladefoged(1975;1993)とその日本語訳であるラディフォギッド(1999), Catford(1977)などを参照。音響音声学についてはケント他(1996;2000), 英語音声学では竹林滋(1996), 中国語の音声学については中国語学研究会編(1969;1979⁵)など、日本語音声学については橋本萬太郎他(1977), 斎藤純男(2006)などを参照。定説ともなっている部分については一々出典を挙げていないが、本稿がこれらの著作に拠ったところは大きい。記して感謝したい。日本語教育と音声学、音韻論の関わりについては杉藤美代子編(1989,1990)に多岐にわたる論考が収められている。日本語で読める音声学の辞書としては、日本音声学会編(1976)がある。音一般についての読み物として日本音響学会編(1996)も参考になろう。世界の主要な言語の音声を簡単に知るためにには、東京外国語大学語学研究所編(1998ab), 国際音声学会編(2003), より多くの言語の音声をさらに詳細に知るために、亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1988-1996)がある。韓国語で書かれた英語などの音声学書は韓国では多く刊行されており、日本語についてのものも민광준(2004)などがある。한국알타이학회 염음(2006)にはアルタイ諸語の現地調査の音声資料収集の実際が細かく紹介されている。なお、本講座の最後の巻では益子幸江の手になる音声学に関する詳細な文献解題が準備される。

2. 音声器官

2.1. 音声器官と調音

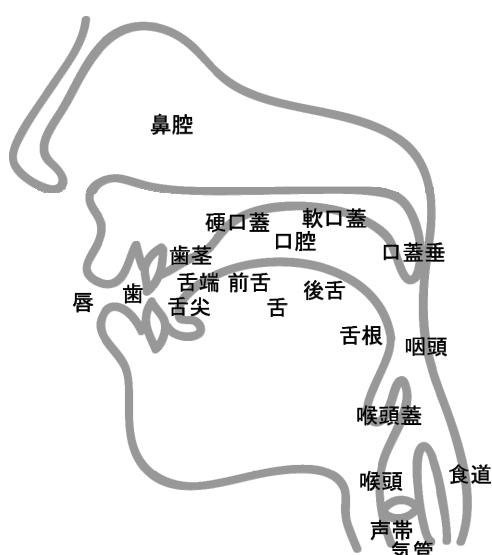
肺から口や鼻に至る、言語音を発するためのヒトの器官を、音声器官(organisms of speech/음성기관)と呼ぶ。言語音を発するために働く大脑などは、音声学では普通は音声器官には含めない。音声器官のうちの特定の調音器官(articulator/조음기관)が特定の言語音を発するために、必要な位置に形を作ったり、運動することを、特に調音(articulation/조음)という。調音器官という術語は、普通は喉頭(larynx/후두)より上方に位置する器官についていう。

2つの調音器官が接近したり接触したりして、音声の通路の狭めや閉鎖を起こし、肺からの気流を妨げることを妨害(obstruction/방해)と呼ぶ。この妨害の起る場所を調音点(point of articulation/조음점)と呼ぶ。調音点と調音方法(manner of articulation/조음방법)で言語音は分類することができる。

2.2. 音声器官の仕組み

肺(lungs/폐)から送り出された呼気は喉頭(larynx/후두)を通る。この中に声帯(vocal cords/성대), 声門(glottis/성문)があり、この声帯の振動の有無で有声音(voiced/유성음)と無聲音(voiceless/무성음)を区別している。

喉頭には咽頭(pharynx/인두)と口腔(oral cavity/구강)³⁾さらに鼻腔(nasal cavity/비강)が続く。口腔の下部は舌(tongue/혓)が大きな位置を占めている。上部をたどってゆくと、口蓋垂(velum/구개수, 목젖)から軟口蓋(soft palate/연구개), 硬口蓋(hard palate/경구개), 齒茎(alveoli/치경), 齒(teeth/齒), 唇(lips/입술)と続く。口蓋垂を下げ、喉頭から出る呼気の一部を鼻腔からも出して作る音が鼻音(nasal/비음)であり、口腔のみから呼気の出る音が口音(oral/구음)である。



3) 「口腔」(oral cavity/구강)を医学では「こうくう」というが、音声学では普通「こうこう」と呼びならわしている。



3. 母音

呼気が口腔を通って唇から出る際に、調音器官による何らかの妨げ(obstruction)を受けないで作られる音を母音(vowel/모음)といい、妨げを受けて作られる音を子音(consonant/자음)と呼ぶ。⁴⁾ 例えば「マ」[ma]というときは、[m]を作る際に、まず唇を閉じている。[m]では唇で呼気が妨害されているわけで、こうした何らかの妨げを受ける音が子音である。

これに対し、[a]のように呼気がどこにも邪魔されずに出て来る音は母音である。口腔で作る母音はどこにも邪魔されないので、基本的に[a:][アー]のように音を長く伸ばすことができるが、[t]や[k]を見てもわかるように、子音は常に伸ばすことができる音だとは限らない。なお、vowelは「声の」の意で、vocalやvoiceと共に、ラテン語vox「声」に由来する。子音は単独では発音されない傾向があり、母音と共に(con)鳴る音(sonant)というわけである。

3.1. 単母音

3.1.1. 単母音の分類と基本母音

日本語東京方言とか、韓国語ソウル方言のように、ある特定の言語の母音体系を母音組織(vocalism/모음조직)という。

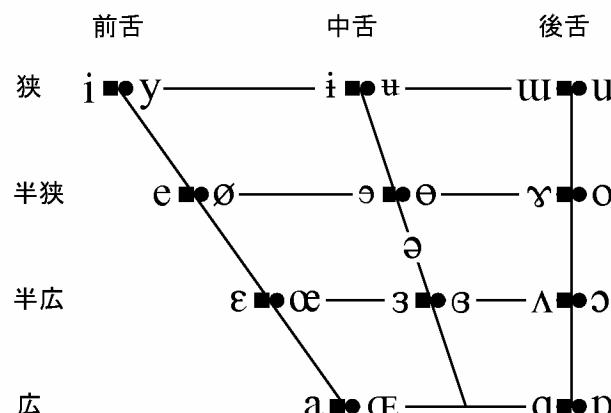
言語の母音組織を見るのには、IPA(the International Phonetic Association)即ち、国際音声学会が定めている基本母音(cardinal vowels)に照らすのがよい。⁵⁾

例えば日本語東京方言の「ア」と「イ」を発音してみると、「ア」は口を開いているし、「イ」はそれに比べて口の開きが狭いことがわかる。また、「オ」と「イ」を

4) 최현배(1929;1937;1955;1961³;56)では「母音」を「홀소리」、「子音」を「닿소리」と呼ぶ。

5) IPAには「国際音声学協会」の訳語も用いられる。IPAが定めた記号をIPA記号といつたり、ただIPA(the International Phonetic Alphabet)と呼んだりする。IPA記号については、プラム&ラディサー(2003)、国際音声学会(2003)が詳しい。本稿もこれらに多くの示唆を得ている。

続けて発音して比べてみると、「オ」よりも「イ」のときのほうが、舌の先が前によりせり出していることがわかる。「イ」のように舌先が前に出る母音を前舌母音 (front vowel/전설모음)といい、「オ」のように後ろに、即ち口の奥に引く母音を後舌母音(back vowel/후설모음)もしくは奥舌母音という。このように、口の開きが狭い母音(close vowel/폐모음)か、あるいは半狭(close-mid)か、半広(open-mid)か、それとも広い母音(open vowel/개모음)なのか、そして舌の位置は前舌か、後舌か、それぞれの度合いによって母音を分類し、次のような母音四角形を描くことができる。さらにこれに唇の形が円い、即ち円唇(rounded/원순)か、円くない、即ち非円唇(unrounded/비원순)かを考え、IPAではそれぞれの記号が定められている。次の図の■は非円唇母音、●は円唇母音である。非円唇母音の[i], [e], [ɛ], [a]と、円唇母音の[ɔ], [o], [u]の8つを第一次基本母音(primary cardinal vowels)と呼び、それらと同じ位置で発音し、唇の形だけが異なる、対応する円唇、非円唇母音8つを第二次基本母音(secondary cardinal vowels)と呼ぶ。円唇母音、非円唇母音の8つの対ができるわけである。次の図にはそれら以外に中舌の母音を加えてある：^{⑥)}



3.1.2. 現代ソウル方言の母音組織の変容—失われる母音たち

現代のソウル方言では母音組織が大きく変容しつつあるといってよい。単母音 (monophthong/단모음)にいくつを認めるかという点からして、研究者によって差が出るほどである。韓国における規範主義的な発音辞書である한국방송공사

6) IPA の 1996 年の修正版をもとに、■●を加え、本稿で作成した。IPA もこれまで改訂が加えられてきているので、不变、一様なものではない。